

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 27 日現在

機関番号：23901

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23730488

研究課題名(和文)現代の地域社会における一時的定住民の社会的動態についての調査研究

研究課題名(英文)Research about the social change of the citizen of temporary domiciliation in the modern local community

研究代表者

井戸 聡 (IDO, SATOSHI)

愛知県立大学・日本文化学部・准教授

研究者番号：40363907

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は現代の観光化や地域活性化の進展する地域社会において特徴的に観察される流動性・移動性の高い社会的集合について、その社会的動態、社会的機能、地域社会との社会的相互作用について明らかにすることを目的とする。この社会的集合の形成要因としては、観光産業の労働力需要が時期により大きく増減する地域特性、家族労働型システムの採用、観光産業の形成過程で流動性・移動性の高い人々を受入れる慣行的な労働システムを構築してきたこと等が挙げられる。当該の社会的集合は地域社会と外部社会とを社会経済文化的に結節する社会的機能を有しており、地域社会とよりも集合成員同士での水平的で親密な関係性が観察された。

研究成果の概要(英文)：This study is intended to clarify the following things, social change, social function, social interaction of the social group that is high in fluidity, mobility, in the local community where tourism industry and regional activation has progressed. Formation factors of this social group include these next points, the local characteristic that work force demand for tourism industry greatly increases and decreases by season, adoption of the family labor type system, a conventional labor system accepting people having high fluidity, mobility. The social group concerned has the social function of node point that unites a local community and outside society socially, economically, culturally. It was observed that the social group concerned had a horizontal, close relationship in group members than a community.

研究分野：社会学

キーワード：社会学 地域社会 労働 余暇 観光

1. 研究開始当初の背景

現代において、地元社会の外部から人々が流入する現象が一般化している地域社会が部分的に存在する。本研究が主として対象とするのは一般的にIターン・移住者・来住者・新規住民と称される新規定住者、および寄留者・季節労働者と称される一時的定住者から構成される社会的集合である。この種の人々を特徴づけるのは、短期間の滞在で移動する旅行者とは異なる、中長期に渡る定住あるいは半定住という点である。また一方で、この種の来住者の特徴的な性格として、地元定住者に対して相対的に流動・移動の志向が高い傾向があることが挙げられる。

本研究で対象としている先述した来住者・一時的定住者の調査研究も、今日的な地方の社会的状況における課題解決への模索という実践的なコンテキストのなかでも、また、学術的な地域社会研究、観光研究においても重要な一領域を占めるはずである。観光研究の文脈で言えば、一時的定住者は、定住と旅行者の中間的な性格を有する集合であると捉えることができるが、先行する研究蓄積の不十分な領域である。また、地域社会研究においても、先行する研究においては、定住者つまり地元住民によって構成される地元社会についての研究と、Iターンなどの移住者の移動に伴う社会変動を捉えようとする研究の2パターンに、そのほとんどが大別され、媒介的存在であり、中間的存在でもあり、周辺的な存在でもある一時的定住者に着目した地域社会研究はほとんどなかったと言える。

こうした一時的定住者についての先行する研究が僅少であることについては、その社会的動態を捉えることが困難であることが一つの理由となっていると考えられる。たとえば、こうした一時的定住民を量的に捕捉するような適当な統計指標は見当たらない。一時的定住民を多く受け入れてきた地域社会であっても、自治体等の公的機関等によって、その量的な把握はほとんどなされてこなかった。

以上のような事情や先行研究状況から、このような社会的存在について把握を進め、その社会的動態や社会的機能について分析考察する研究が求められると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は現代の特に観光化や地域活性化の進められる地域社会において特徴的に観察される流動性・移動性の高い社会的存在の集合を事例として取り上げ、この社会的集合を構成する人々の社会的動態、当該集合の社会的機能、地域社会との相互作用の実態について、社会学的アプローチからの究明を目指すものである。

この社会的存在の集合はその流動性・移動性の高さのために、これまでなかなか正確に捕捉されてくることがなかった社会的存在

であると言える。また当該の地域社会においても周辺的な存在として位置づけられてきたため、その社会的な機能や影響については地元社会からも等閑視されてきたと考えられる。

しかしながら、観光化・地域活性化についての地域社会における現代的な展開を考察する上では、こうした一時的定住者が重要なファクターとなっており、また地域社会を構成する少なからぬ社会的要素となってきたと考えられる。というのも、これらの社会的存在なくして、本研究が対象とする事例地における観光産業や地域社会の形成は成り立たなかったのではないかと考えられるからである。また、少子高齢化や過疎化、限界集落化等、地域社会の衰退に歯止めがかからない全体社会的な今日的状況のなかで、本研究の事例地は、その他の地方社会に比して、社会的な衰退傾向を長らく止めてきたのであり、また近年、衰退傾向を見せ始めてきてはいるものの、それが極めて緩やかな進行に止められてきているのは、この地域の観光産業という特性に加えて、これらの社会的集合の存在が少なからず影響を与えてきたからではないかと考えられる。

農山村社会の生き残りについて、都市社会とのつながり・交流等にその鍵があると捉えられている傾向があるなかで、都市社会との媒介的存在としての社会的機能を果たしてきたと考えられる当該の社会的集合について探求することは、地域社会の社会的性格や社会的存続を考究する上でも意義のあることであると考えられる。

3. 研究の方法

本研究では、この来住者・一時的定住者を選択的非定住民という社会的集合として捉える概念的枠組みを用意し、フィールドワーク法による社会的動態の調査研究を行なうことによって彼・彼女らの実像を浮き彫りにすると同時に、この種の社会的存在の社会的機能、地域社会との社会的相互作用について考察し、地域社会研究や観光研究における議論に理論的な検討を加えるという研究方法を採る。

調査研究の対象地としては、戦前に一般的な農山村社会から、戦後、観光地化が進行し、観光産業を発展・形成してきた地域社会として主に長野県・北海道・愛知県等の農山村を選出した。そのなかで、長野県の事例地では、戦後、主に高度経済成長期に急速に観光産業を発展させ、特に旅館や民宿等の宿泊業が一時期に急増して、観光村落としての社会的性格という輪郭を明瞭化し、またその後、都市社会からペンション経営等により移住者の流入によって、さらに旅館や民宿とは異なるタイプの宿泊業も増加した。

こうした宿泊業等の観光産業を下支えしてきたのが選択的非定住民という社会的集合であるといえる。

当該の事例地では、冬季のレジャーの場としてのスキー場開発が観光開発の軸として進められてきたのであり、夏季は伝統的な農業を行うことで一年の労働サイクルとする半農半観光型の地域を形成してきた。こうした地域においては、一時的定住民としての季節労働者は、地域の産業特性に適合的な労働力として機能してきた。

しかしながら、こうした選択的非定住民は一般的に流動性・移動性が高く、また、住民登録や国勢調査等の点において、地域社会へ居住や滞在の痕跡が残りにくいために、既存の定住者を前提とする住民登録システムや社会的な計量システムのなかで捕捉することが極めて難しい社会的存在であったと言える。

本研究では、その捕捉の困難性を乗り越える手段としてフィールドワーク法を採用している。本研究におけるフィールドワーク法では、選択的非定住民の間で形成されている人間関係やコミュニティに分け入ることによって、通常は捕捉困難な社会的集合の実態について浮かび上がらせることを可能にする手法を採用している。

4. 研究成果

現代の特に観光化や地域活性化の進められる地域社会において特徴的に観察される流動性・移動性の高い社会的存在の集合の形成要因としては、観光産業における労働力需要が時期により大きく変動し増減するという観光産業面における地域特性、労働形態として、家族労働集約型のシステムを伝統的に採用してきた歴史的過程があること、戦後の観光産業の形成過程で流動性・移動性の高い人々を受け入れやすくするような労働システム慣行を構築してきたこと、などが挙げられる。

本研究の対象事例地は長野県の寒冷地であり、豪雪地帯・山岳地帯という地理的、気候的な地域特性に根差した観光産業（スキー観光産業）を形成してきた地域である。冬季レジャー観光産業を主産業とする社会においては、様々な面で季節による偏りが出やすい。

冬季が観光産業の主要な期間となり、それ以外の時期には、それまでの伝統的な農耕を生業として行う産業サイクルを、地域的な歴史的展開のなかで作り上げてきたのが当該事例地である。つまり半農半観光の地域社会を形成してきたといえる。

こうした季節型の観光産業の地域社会では、季節により必要とされる労働力が大きく変動する。そのため、特に季節労働型の労働者が適合的な労働力として求められてきた。

以上のような時期的に偏りのある労働力需要という地域的な特性が、当該事例地に選択的非定住民という社会的集合を形成してきた要因の一つであるといえる。

当該事例地では、民宿や旅館といった宿泊

業が観光産業における主要な業種となっている。こうした民宿や旅館の形成についての歴史的展開においては、山岳への登山者の便宜を図る山案内業と、同時に一般農家家屋を間貸しなどのかたちで宿泊施設として提供する農家民宿として発祥し、それをルーツとしつつ、踏襲するようなかたちで家族の生活空間である住居の一部もしくは大部分を客用の宿泊施設として提供するような、職住一体型の宿泊業形態を形成してきた。この宿泊業形態においては、家族構成員がその主要な労働力とされ、血縁者・地縁者等が補助的な労働力として適宜採用されるような家族労働集約型の労働力供給システムを伝統的に形成してきた。観光産業が拡大していくなかで、家族・血縁者・地縁者以外の外部の労働力が必要とされるようになったが、外部から流入する人々に対しても、家族労働集約型の労働慣行が適応され、家族労働力に類似する外部労働力として受け入れる文化が形成されてきた。そのため労働のみに専門的に関わる、単純な賃金労働者としてではなく、家業としての宿泊業労働と、家の経営としての家族労働とが混然となるような特徴的な労働慣行文化を形成してきた。血縁者や地縁者以外の外部からの労働力を動員する際も、家族という人間関係の枠組みを拡張するような仕組みのなかで受容する様式を採用してきた。このことは流入する外部者にとっての半定住的・非定住的な居場所を提供しやすい社会的条件となったと言える。そのような家族労働集約型のシステムを歴史的に形成してきたことが、流動性・移動性の高い社会的集合としての一時的定住民を社会的に受容しやすい素地となってきたと言える。

さらに、こうした一時的定住民の流入を受け入れるに当たり、そのインセンティブとなるような賃金や労働環境以外の要素を提供したり、一時的定住民の多くが求めてきた現地でのレジャーの享受を可能にする労働時間や労働条件などの環境を作り出したりしてきたことが、そうした外部の人々を周辺地域社会へと定期的・継続的・長期的に誘導する社会的な通路を構築することに繋がってきたと考えられる。

つまりこうした流動性・移動性の高い社会的存在の集合は、自然発生的もしくは偶発的に誕生してきた社会的存在ではなく、事例地の地域社会の社会経済文化的条件を基礎にしながら、人々の行為・選択が繰り返されながら社会的に共通する外部者の受容システムが社会的に構成されることによって導き出されてきた側面があり、一方で外部社会との権力的な非対称的關係の社会構造のなかから生み出されてきた社会システムであると考えられるのである。

当該の社会的集合は地域社会と外部社会とを社会経済文化的に、また有機的に結節する社会的機能を有しており、地域社会との垂直的な関係性よりも集合成員同士での水平

的で親密な関係性が観察された。

当該の社会的集合は地域社会と外部社会とを媒介的に結節する有機的機能を持っていると考えられる。これらの社会的存在は当該社会に外部社会の文化的、経済的、社会的諸事物を招き入れるメディアとして機能していると考えられるのである。そのことによって都市社会から隔たった地にありながらも、都市社会との間接的な交流を恒常的に維持し続けることで、都市社会的な要素を不断に受容し続け、社会的な活性性を保持し続けてきたのではないかと考えられる。そのことによって農山村としての基本的な性格を持ちながらも、周辺諸地域と比較して、現代的な社会的衰退傾向を緩やかに止めることができてきたものと推察されるのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

井戸聡、平成24年3月「文化を保存しようとするとき 名古屋港筏師一本乗りの保存の実践についての一考察」、『愛知県立大学日本文化学部論集(歴史文化学科編)』第3号、1-22頁、査読無

〔学会発表〕(計1件)

井戸聡、平成24年8月1日“Social function as intermediate group of leisure service industry in local community in a Japanese mountain village”, Second ISA Forum of Sociology, Buenos Aires, Argentina

〔図書〕(計1件)

井戸聡、平成26年3月「名古屋港の筏(名古屋港筏師一本乗り)」、『大学の愛知ガイド』、愛知県立大学歴史文化の会編、昭和堂、282p.、143-165頁

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

井戸 聡 (IDO, SATOSHI)

愛知県立大学・日本文化学部・准教授

研究者番号: 40363907

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号: